

私たちが受け継ぐ平和への誓い

雲ひとつない青い空を見上げたとき、私はふと、胸がざわつくような、不思議な気持ちになることがあります。私が見上げているこの空は、八十年近く前、爆弾を積んだ飛行機で敵艦へと突き進んでいった若者たちが見た空と繋がっているからです。

鹿児島県の知覧特攻平和会館などの資料館に残された写真の中の隊員たちは、驚くほど穏やかな笑顔を浮かべていました。子犬を抱き、仲間と肩を組み、まるで明日もまた同じように笑いあえることが約束されているかのような表情です。しかし、彼らが向かった先は二度と生きて帰ることのない「死」の場所でした。中学生になった今の私にとって、それはどれほどの恐怖だったろうかと想像するだけで、あまりにも残酷で、胸が苦しくなります。

私は先日、特別攻撃隊についての資料を読み、彼らが残した遺書に触れました。そこには「お国のために喜んで死ぬ」という言葉が並んでいました。しかし、その言葉の奥には、残していくお母さんへの愛情や愛する人を守りたいという切実な願いが溢れ出していました。ある隊員は、「会いたい、話したい、無性に」と本音を記していました。彼らが命をかけて守ろうとしたのは、「国」という大きくて見えないものだけでなく、家族で囲む食卓や、大切な人と歩く道、そして私たちが今、当たり前のように過ごしているこの「日常」だったのだと思います。

しかし、彼らが守ろうとした「平和」な世界は今、大きな危機を迎えています。テレビをつければ、ウクライナやパレスチナのガザ地区などで、瓦礫の山となった街を泣きながら歩く子どもたちの姿が映し出されます。特攻隊員たちが生きた時代と同じように、爆撃に怯え、大切な人を失い、明日を生きられるかも分からない人々がいます。八十年という長い年月が経ち、科学や技術は大きく進歩したのに、人間はまだ「武力で解決する」という愚かな選択肢を捨てられずにいます。ニュースで見る戦火の映像は、決して遠い国の出来事ではありません。特攻隊員たちが散っていったあの空の延長線上で、今この瞬間も命が奪われていると思うと、とても悲しく、やるせない気持ちになります。

特攻という作戦は、人の命を兵器として扱う、絶対にあってはならない過ちでした。当時の若者たちはなぜ、自分の意志を曲げてまで死を受け入れなければならなかったのでしょうか。それは、社会全体が「戦争をするのが当たり前」という空気に支配され、「おかしい」と反対することが許されなかったからです。私は、この「空気」の怖さを、今の私たちも絶対に忘れてはいけないと思います。周りに流されるままに自分の意見を言えなくなってしまったら、それは形を変えた戦争への第一歩ではないでしょうか。SNSで誰かを一方的に攻撃したり、多数派の意見に流されて誰かを仲間はずれにしたりすることは、形を変えた「争い」の種なのだと思います。

私たちが特攻隊の戦没者を慰霊するということは、ただ過去を悲しむことではありません。彼らが守りたかった日常を私たちが責任を持って引き継ぎ、より良いものにしていくことこそが、本当の意味での供養になるのだと思います。戦争を経験した世代が少なくなっていく中で、その記憶を風化させないことは、私たち若い世代の使命です。私たちは、彼らが遺した言葉をしっかり受け止め、これからの平和のために何ができるかを考え続けなければなりません。

平和とは、ただ戦争がない状態をさすものではありません。誰もが自分の想いを自由に言葉にでき、明日を夢見ることができ、そして何より「生きたい」という願いが大切にされる社会のことです。私は、特攻隊の方々が最期に見た空の色を忘れません。そして、今も戦火の中にいる人々に思いを寄せながら、まずは自分の周りの小さな争いをなくすことから始めます。相手の違いを認め、話し合うことを諦めないこと。その小さな積み重ねが、いつか世界を繋ぐ大きな平和になると信じています。

八十年前、空へ散っていった無数の命に恥じない未来を、西岳中学校の生徒として、私は自分の言葉と行動で創っていくことをここに誓います。

都城市立西岳中学校
生徒代表 3年 村山 一心